

調査講評

東京大学社会科学研究所教授 玄田有史

# 震災が親子の絆を強め 進路意識にも影響を与えた可能性

本調査の設計からかかわった東京大学 玄田有史教授に調査全体について講評をいただきました。

「毎日を大切に生きたい」と改まる親子の気持ち

前回09年調査は、08年後半から押し寄せたリーマン・ショックによる影響が非常に大きかった印象があります。当時と比較すれば今回は日本経済が幾分持ち直しているためか、データにもそれが見受けられる感じがしました。「未来社会への認識」(23 p 図25)や「進路を考えたときの気持ち」(21 p 図21)がやや上向いた印象を受けるのは、その影響かもしれませんね。

また、さまざまなデータから、進路に関する親子のコミュニケーションは全般に良好な状態のように見受けられました。が、それには少なからず東日本大震災の影響もあるのではないかと思います。家族とは、平時は意外に退屈なものですが、あのような危機を目の当たりにすると、自ずと一体感が強まるもの

です。大きな不安が、最も頼れる存在として親子の結びつきを強めたと考えられるかもしれません。

また、震災のような大きなできごとは、個々の人生観・キャリア観にも十分に影響を与え得るものだと思います。「毎日を大切に生きたい」という子どもたちの気持ちの高まり、「毎日を大切に生きてほしい」という親の子を思う気持ちの高まりは、その顕著なものといえます(26 p 図29)。あるいはこのようなデータに現れないところでも、震災は人々に多大なる影響を与えたであろうと私は想像します。

ピンチは人を変えます。これからどうすればよいかと慌てふためく人もいれば、普段おとなしい人が急に水を得た魚のように活発になることもありま。阪神・淡路大震災の時も、ボランティアをきっかけに引きこもりを、卒業した人たちがいました。今回の震災を

きっかけにして個々人のキャリア観がどう変わったのか？ 平均値ではわからないバラつきや、個々のリアルな変化も今後探っていくべきでしょう。

「希望」を保つために「絶望」は避けよう

保護者にとって、子どもの進路選択に関してアドバイスするのは難しいようですが(24 p 図26)、私にも気持ちはよくわかります。先行きの見通しが良い時代というわけではなく、おそらく保護者自身も課題を抱えるなか、子どもに語るべき言葉に悩むのは当然でしょう。こんな時は、結局基本に戻るしかないような気がします。

「いろいろな経験をしてみよう」  
「私が子どもに言うとしたら、こういうシンプルな言葉でしょう。20代くらいまでは、そんなスタンスでよいのでは

ないかと思っています。ただし、最悪の状況だけは避けなければなりません。働くことでトラブルに遭ったら、日本各地にある「総合労働相談センター」に相談をすること。そういったトラブル解決に関する情報や知恵は、親子で共有しておいたほうがよいでしょう。

さらに言えば、保護者は子どもに対して、「やりたいことをやろう」と言い過ぎないことも大切です。ともすれば「自分探し」という無限ループに陥りかねないからですが、それよりも「これだけはやめてくれ」と、親が避けてもらいたいことを素直に伝えるほうがよいと思っています。「○○○という職業はやめたほうがいい」でもいいし、「○○○という会社はやめたほうがいい」でもいい。「善悪」を問うてほしいわけではありません。親は自分の人生のなかでさまざまな失敗や苦労をしているはずですから、そのなかで掴んだ教訓や自分の哲学は子どもに伝えるべきですし、逆に言えば、親が言えるのはその程度のことかもしれませんね(談)。



げんだ・ゆうじ●専門分野は労働経済学。希望の社会科学(希望学)や無業者、不安定雇用者、キャリア教育などに関する研究を行っている。「希望のつくり方」「仕事のなかの曖昧な不安」など著書多数。